

## 年間第32主日の説教

金 大烈 神父 2009年11月8日(日)

### 《真空妙有》

おはようございます。

聖書の中に登場する人物の中で、一番イエス様から叱られ、嫌われたのは律法学者やパリサイ派の人々です。今日の福音(マルコ12:38-44)の中には、その人達がどの様な生き方をしたかが良く描かれています。簡単に言いますと、パリサイ派の人々や律法学者達は、その時代、既得権者でした。何故ならその時代は政教一致の時代でした。政治を司る人と宗教の指導者は殆ど同じ役割を持っていました。例えば、ある会堂で司祭が語った一言は、宗教的な力だけでなく、政治的な力を持って、それを守らなければならない様な拘束力が生じるものでした。司祭が話した事は守らなければならないというイメージが強かった時代でした。宗教と政治が分離されていない時代でしたので、彼等がまじめな生き方をしようとしても、色々な誘惑に囲まれていたと思います。自分でも知らないうちに権力をふるってしまう様な人になっていたと思います。力のない人々からみれば、それは親しみを持って、受け入れにくいものでした。もちろんその中で、一生懸命自分の使命を果たそうと頑張っていたパリサイ派の人や律法学者の人達がいたと思います。

しかし、イエス様にいつも指摘されたこの人々の生き方は、本来は神様を探し、神様のみ旨を黙想し、それを人々に伝えるのが一番大きな役割でしたが、彼等は出世というか、偉くなる為にこの道を選ばなくてはならないという思いから、パリサイ派や律法学者を選んだかも知れません。とにかくこの人々はイスラエル全体にあって、一番力のある勢力でした。王達も彼等の意見を無視しては何も出来ず、民は彼らの言葉に耳を傾けた、その様な権力を持っている既得権者の群れであったのです。

この人々とは逆に、イエス様から今日の福音で褒められた人が、それはどのような人だったのでしょうか。やもめ・寡婦・未亡人と言われる人でした。その時代に“やもめ”はどの様な存在だったのでしょうか。それは、いつも守ってあげなければならない弱い立場の人々でした。当時は男性が労働力を担っていました。ですから、お金や全ての財産を築くのは男性でした。夫が外に出て働き、得たものが彼等の財産になりました。そして、女性は労働力を求めても、ほとんどが許されていませんでした。畑に残ったものの処理や、家畜の世話、家庭の仕事くらいでした。ですから、“やもめ”になったと言うことは、経済力を失う事と全く同じでした。誰かが面倒みなければ、その人達はなかなか暮らせない環境でした。自分の力では立ち上がれないという立場の人、それが“やもめ”でした。

旧約聖書の中にも、申命記24章19節、『畑で穀物を刈り入れる時、一束畑に忘れても、取りに戻ってはならない。それは寄留者、孤児、寡婦のものとしなさい。こうしてあなたの手の業すべてについて、あなたの神、主はあなたを祝福される』と書かれる位、“やもめ”は守ってあげなければならない存在でした。その人がいくら賽銭箱に入れたと書かれていますか。2レプトン、レプトンはギリシャの貨幣単位で、その中で一番低いお金の単位です。一円にもならない位です。その位のお金を賽銭箱に入れたのです。ところが、その様子を見て、イエス様は凄く褒めたのです。『この賽銭箱の中に入れた者の中で、一番大きな金額を入れた者は、このやもめである』とおっしゃいました。もっと面白い表現は『金持ちがたくさん入れた』と書いてあります。金持ちがお金をわざわざ少しだけ入れたわけでは無く、金持ちは献金を“たくさん”入れたと書かれています。しかし、この“やもめ”が入れたのはたった2レプトンだけでした。

イエス様が褒めたのは、お金の大きさではありません。何でしょうか。現代に生きている私達にも

必要な事が今日の福音に書かれています。それは、その献金に“まごころ、真心”が込められているかどうかです。たった2レプトンを献金として捧げた、貧しいやもめ、その人にとっては全財産だったとイエス様はおっしゃっています。しかし、たくさんあるもの、余ったものの中での1万、100万でもそれは高く評価されないことを仰っています。

私達が献金する時にこの言葉を聞いて“この言葉は、信者がたくさんの献金をするように誘う福音ではないか”という解釈はいけない事です。これはたくさん献金をしなさいという意味ではありません。ただの1円を捧げても、本当に心を込めて、ただの心ではなく“まごころ、真心”込めて捧げるかどうか、物乞いする人に投げ与える様な感じで賚銭箱に入れているのではないか、を意識しなければなりません。

結局、パリサイ派の人や律法学者が一番批判された事は、この様な一面でした。私達はこの様に“中身”ではなく“皮”に命をかける愚かな姿を捨てなければならない事を今日の福音をとおしてもう一回考えてみました。

皆様、お願いします。1円でも良いのです。空手でも良いのです。しかし心を捧げて下さい。心をささげようとするれば、イエス様に捧げるものが何であるか、すぐ分かります。人の事、人の眼を意識しないで下さい。神様と皆様1対1の事です。「私の心をあなたに委ねます」という気持ちで捧げることが、“献金”である事をもう一度意識しましょう。

もう一つこの福音を読んで思い浮かんだ事を皆様に紹介させていただきます。

これはうちの信者さんに書いて頂いた文ですが、「真空妙有」と書かれています。

どの様な意味でしょうか。易しくいいますと、「本当に空になったら、妙に何かがある」という意味です。と言うことは、“捨てること”によって“得られる”という意味です。この言葉は、仏教の禅で出された言葉です。よくご存じの“般若心経”の中でも“空(くう)”についての色々な精神が表れています。“空(くう)”、“から”、“何もない”。

自分の持っている全てのものを“空”にする、なくす事。今日2レプトンしか持っていないやもめが、自分が持っている全てのものを賚銭箱に入れられたその力は、やはりこの様な事ではないかと思えます。持っている者は、捨てる物がありません。持っていない者は、ある意味で惜しみなく全てを分かち合えます。結局、正しさ、真理というものは、自分が握ろうとすれば逃げます。しかし、自分は何もない、全てを捧げますという時こそ、得られるものではないでしょうか。キリスト教の精神と全く一致しています。

私達は色々な事に執着しながら生きています。こだわるべきものだったらそれは大事です。しかしよく考えてみますと、執着してはいけない物事によって、本当に集中しなければならないものさえ、失ってしまう場合が多いのが私達の生き方ではないかと今日の福音を通して反省してみました

皆様、この言葉「真空妙有」、よく黙想して下さい。本当に素晴らしい言葉です。ものだけに限られた話ではありません。心です。皆様の心が今どうなっているのか、何を求めているのか、それをよく考えさせる言葉ではないかと思えます。

最後にもう一度、皆で読んでみましょう。

「真空妙有」(しんくうみょうう)

ありがとうございました。